

# MUSEUM PRESS

鳥取県立博物館ニュース  
Newsletter of the Tottori Prefectural Museum

MARCH 2007 No.  
平成19年3月発行

3



シベリアトラ（はく製：きしわだ自然資料館蔵）

## 企画展

「挑戦者たち —動物の適応進化と性淘汰—」……………2

## 企画展

現代の表現 鳥取 vol. 4

「中ハシクシゲ展 ZEROs —連鎖する記憶—」……………3

企画展「石谷コレクション展」……………3

[自然] 観察ガイド唐川湿原(岩美町)のカキツバタ群落  
資料紹介小・中学生が発見した貴重な化石……………4

[人文] 資料紹介馬医の医術書  
コラム常設展示室「鳥取藩と朝鮮国」コーナーの設置について……………5

[美術] 新収蔵品紹介坂本章《掛分組浅鉢(かけわけくみあさばち)》  
コラム没後200年 鳥取藩絵師・土方稻嶺  
連載学芸員という仕事第3回……………6

[山陰海岸学習館] 山陰海岸学習館で海の自然体験をしよう!

[収蔵管理] 美術展示、移動美術館……………7

講座・観察会・アートシアター、展覧会カレンダー……………8



Tottori Prefectural Museum  
鳥取県立博物館

# 挑戦者たち —動物の適応進化と性淘汰—

現在の地球上には、数千万種ともいわれる、多種多様な動物たちがくらしています。彼らの姿かたちは、それぞれの生息環境やライフスタイルに実にうまくマッチしているものもあれば、思わず首をひねってしまうような、ふしぎなかたちをしているものもあります。動物たちがこのような進化をとげてきた背景には、“いかに生きのび、子孫を残していくか”という、彼らの「挑戦」の歴史があります。本展覧会では、動物たちのさまざまな進化の様子を紹介し、その秘密にせまります。

まず第Ⅰ章として、極限環境での生活に挑戦した動物たちを紹介します。極寒の世界に挑んだホッキョクグマ（写真①）やシベリアトラ（表紙写真）は、長く密生した毛と厚い皮下脂肪をもち、寒さをふせいでいます。また体内の熱を逃がしにくいように、非常に大きな体をしており、どちらも肉食獣では「地上最大級」という巨体です。展示では、その迫力もお楽しみください。その他、乾燥の大地に踏み込んだフタコブラクダやカンガルーネズミ（写真②）、暗黒の闇の中にひそむ土壌動物たちなど、過酷な環境の中でたくみな工夫を凝らしつつ生き抜いている動物たちが登場します。

つづいて第Ⅱ章では、進化の過程で「まったく新たなライフスタイル」を獲得した動物たちを紹介します。セキツイ動物の中ではじめて陸上生活に挑んだ両生類、地上から大空に飛び出し



①極寒の地でくらすホッキョクグマ  
〔はく製：きしわだ自然資料館蔵〕

た昆虫類や鳥類、陸上からふたたび海にもどったウミガメやアザラシ、イルカなどです。彼らは、あしを、翼を、そしてヒレを発達させることで、新しい世界での生活に成功しました。展示では、彼らのさまざまな工夫の様子を紹介します。



②砂漠にすむカンガルーネズミ  
〔はく製：群馬県立自然史博物館〕

第Ⅲ章では、動物たちが「食うために」そして「食われないために」進化させた特徴について見てみます。哺乳類の歯やあごの構造、鳥類のくちばしなどは、それぞれの食べ物と実にうまく対応しています。一方、そういった動物たちのエサとなってしまう動物たちは、自分の身を守る術を発達させました。逃げる、かくれる、だます、そしてヨロイで固めるなど、その方法はさまざまです。

このように動物たちは、それぞれの生息環境の中で、うまく生活していけるような進化をとげてきました。では、こういった進化は、いったいどのようなしくみによっておこったのでしょうか？ 展示では、「自然淘汰」という考え方にもとづいて、進化のしくみについて考えてみます。

ところで、動物の中には、同じ種類でも、オスとメスとでかたちがとても異なるものがあります。ライオンの立派なたてがみ、シカやカブトムシの勇ましいツノ、クジャクやフウチョウ（写真③）の美しい羽・・・これらはみんな、オスだけにあるものです。同じ種類であれば、同じ環境の中で生活してきたはずなのに、なぜ異なる姿に進化したのでしょうか？ どうやら、オスとメスとで「進化の仕方」が異なる場合があります。このような進化のしくみ



③ふしぎなかざりのついたオオフウチョウのオス  
〔はく製：鳥取県立博物館蔵〕

は、「性淘汰」と呼ばれます。

第Ⅳ章では、「性淘汰」による、オスとメスそれぞれの進化について紹介します。メスをめぐってオス同士で「闘争」したり、メスが美しいオスを「選り好み」したり、時にはオスとメスとで「対立」したり・・・、動物たちの進化の物語は、人間以上にドラマチックかもしれませんね。

本展覧会では、顕微鏡で実物標本を観察したり、タッチング標本で感触を確かめたりして、動物たちのたくみな進化の様子をより間近に感じられるコーナーも設けます。展示を通して、動物たちのさまざまな「挑戦」の歴史を体感していただけたら幸いです。

（自然担当学芸員 一澤 圭）

## 企画展の詳細

- 会 期：7月14日(土)～8月26日(日) 無休
- 会 場：2階 第1・2特別展示室
- 料 金：一般/800円（団体/600円）
- 関連行事

- ・シンポジウム  
「砂丘に挑戦した生きものたち  
—知られざる鳥取砂丘の生命—」  
7月15日(日) 14時～16時  
会場：当館2階講堂、無料
- ・学芸員講座  
「小さな挑戦者たち  
—木にのぼる土壌動物—」  
7月22日(日) 14時～15時30分  
会場：当館2階講堂、無料
- ・学芸員講座  
「鳴く虫の聞き分けに挑戦！」  
8月5日(日) 14時～15時30分  
会場：当館2階講堂、無料
- ・学芸員講座  
「ライバルを払い落とす  
—イカしたオスの精子競争—」  
8月26日(日) 14時～15時30分  
会場：当館2階講堂、無料



# 現代の表現 鳥取 vol.4 中ハシクシゲ展 ZEROs -連鎖する記憶-

## NAKAHASHI Katsushige ZEROs -Interacting Memories-

「現代の表現 鳥取」は、鳥取にゆかりのある、現在活躍中の作家や、近年亡くなった優れた作家を、年齢、ジャンルに制限を設けることなく、広い視野を持って採り上げ、個展・グループ展の形により紹介するシリーズ企画展です。

4回目の今回は、現代美術作家・中ハシクシゲ（1955年 香川県生まれ）をとりあげ、近年世界各地で精力的に展開している2種類のプロジェクトを紹介します。

「ZERO Project (ゼロ・プロジェクト)」は、特定のエピソードを持つ、主に零戦のプラモデルを微細に接写した写真約25,000枚を張り合わせ、実物大の飛行機を作りあげるもので、完成、展示後はゆかりの地で焼却されます。一方「On the Day Project (オン・ザ・デイ・プロジェクト)」は、戦争に関連した歴史的な事件が起きた同じ日付に、日の出から日没まで現場を接写した約5,000枚の写真を張り合わせ、巨大なフォト・レリーフを作りあげる作品で、展示したのち切り分けられて参加者に配られます。

いずれのプロジェクトも作品の制作には一般参加の地元のボランティアが携わり、そこで世代を超えた対話と交流が生まれます。最終的に作品は消滅



《ZERO Project BII-124/Darwin,Cowra》を運ぶボランティア 2002年 撮影：Greg Daly

しますが、「モノ」としての作品よりも、より強く人々の記憶に残る「コト」に、このプロジェクトの本質があります。

本展では、過去に行われた6つの代表的なプロジェクトを紹介するとともに、鳥取県にちなんだゼロ・プロジェクトの新作《ZERO Project SUISEI-43 / Tottori》を公開共同制作します。

第二次大戦体験者の高齢化を考慮して、「ZERO Project」は2009年で一旦完結をみる予定です。タイトルのZEROsは西暦2000年代を表すと同時に、複数の「ZERO Project」、あるいは参加者それぞれの記憶が重なり合い、ひとつの作品体験へと結集していくさまを象徴しています。本展が世代や立場を超えてともに語り、考える機会になれば幸いです。

(美術担当学芸員 赤井 あずみ)

### 企画展の詳細

- 会 期：4月28日(土)～5月27日(日)会期中無休
- 会 場：2階第1・2・3 特別展示室
- 料 金：一般 600円(前売り・団体 400円)

### ■関連行事

- ・アーティストトーク  
4月28日(土) 14時～  
会場：講堂
- ・トークセッション  
講師 松井みどり(美術評論家)×中ハシクシゲ×尾崎信一郎(美術振興課長)  
5月13日(日) 14時～
- ・学芸員によるギャラリートーク  
5月19日(土)、5月26日(土) 14時～
- ・《Zero Project SUISEI-43 / Tottori》  
バーニング  
5月27日(日)  
会場：航空自衛隊 美保基地/参加無料  
(詳細はお問い合わせください)  
※作品を制作するボランティア募集中です。  
詳細はお問い合わせ下さい。

# 「石谷コレクション展」

当館では、平成17年度に鳥取県智頭町の石谷家より、書画および陶磁器などの工芸品の併せて300件を超す作品を御寄贈いただきました。石谷家は屋号を塩屋といい、江戸時代には智頭宿の大庄家をつとめており、現在その住宅は国の登録有形文化財にも指定されています。同家からは、昭和54年度にも150余点の書画作品を御寄贈いただいております。当館の主要なコレクションのひとつとして、これまで美術展示等で陳列しておりますので、ご覧になった方もいらっしゃるかと思います。二

度目の受贈となる今回の作品は、同家に代々伝えられたもので、その内容は、与謝蕪村や曾我籙白などの江戸時代の絵画をはじめ、日本・中国の書跡や、近代の京焼を中心とする陶磁器などの工芸品等、広範囲にわたっています。石谷コレクション全作品を御紹介したいところですが、本展では、新しく収蔵されたコレクションを中心に、選りすぐりの名品を展示します。

(調査担当学芸員 山下 真由美)



### 企画展の詳細

- 会 期：平成19年6月2日(土)～7月1日(日)無休
- 会 場：鳥取県立博物館 第3特別展示室
- 料 金 一般=300円/団体=200円  
/小・中学生、高校生、学生=無料

### ■関連行事

- 学芸員講座「石谷コレクションについて」  
6月9日(土) 14時～

# 唐川湿原(岩美町)のカキツバタ群落



唐川湿原は岩美町の西南端、大茅山から稲葉山に広がる溶岩台地上の谷が閉塞し、植物化石を含む泥炭層が堆積してできた湿原です。東西200m、南北800m、大沢池と小河川にそって大小の湿地が分布しています。その中の大沢池下流にある湿地にカキツバタが自生し、愛知の小堤西池、京都の大田の沢と並び日本三大カキツバタ群落として、国の天然記念物に指定されています。

カキツバタは「加吉都八播多 衣に摺りつけ 丈夫の きそひ獵する 月は来にけり(大伴家持)」の歌のように、花が染料に使われ、“書きつけ花”と呼ば

れていたのが名前の由来だと言われています。また、「何れ菖蒲か杜若」と言われるほどアヤメに似ていますが、アヤメと違い湿地だけに生育し、外花被片(注)に白い筋があり、葉の幅が広いことで見分けることができます。

例年、5月中旬から6月上旬には、「幸運」の花言葉どおり、見た人に幸せをもたらすかのように爽やかな紫紺色の花が咲き誇り、湿地を一周する遊歩道から間近に見ることができます。また、途中には大沢池を水源とした水路の漏水が湿地にそそぎこむ滝があり、大沢池が良好な湿地環境を作っていることに気づかされます。

さらに、唐川湿原には流水地、滞水地、湿潤地とさまざまな環境が混在し、100種以上の植物が生育しています。春にはサワオグルマ、トキソウ、初夏から夏にかけて食虫植物のモウセンゴ

ケやタヌキモの仲間、その他にもカキラン、ミズチドリ、ユウスゲ、秋にはサワギキョウ、サワヒヨドリなど、四季を通じて花を楽しむことができます。また、世界最小のトンボの仲間、ハッチョウトンボが生息し、7月上旬に全長約2cm、500円玉に隠れるほどの小さな姿を見ることができます。

(自然担当学芸員 高木 邦昭)



(注)外花被片は、がくが花びらのように変化したもの

## 【鳥取方面】

岩倉で県道291号線から稲葉山を通り岩美町に行く道を「うえき村」「美歎牧場」の看板を目印に10Kmで駐車場に。

## 【岩美方面】

国道9号線から県道37号を南に進み案内板を右折、山道(ガードレールなし)を5Kmで駐車場に ※駐車場からは400m

## 資 料 紹 介

# 小・中学生が発見した貴重な化石

地学常設展示室内に展示している資料の中に、県内の小学生と中学生(発見当時)が発見し、全国さらには世界的にも大きな価値をもつ2つの化石があります。

1つは、写真1の化石です。この化石は、1984年(昭和59年)8月、当時船岡町立大江小学校4年生であった小原あかねさんが船岡町橋本(現八頭町橋本)の大江川の河原に落ちていた石ころの中に発見した魚の化石(魚の種類については不明)です。

この化石は頭部と尾部を失っていますが、長さ11.5cm、幅4cmで、6~7mmほどのせきつい骨が15個、神経棘8個、ろっ骨7個が保存されています。そして、神経棘の先端がT字形にふくらんで



写真1 県内最古の魚化石

いる点やろっ骨が分岐するなどの原始的な形態が見られるものの、せきつい骨が臼形で現代的な魚の要素もそなえています。

この化石を含んでいる石ころは、淡黄灰色の層状の珪質岩で、検鏡すると径20~30マイクロメートルの微細な石英粒の集合する珪質部分と比較的泥質な部分からなります。泥質の部分にはコノドントとよばれる中生代の三疊紀(約2億年前ごろ)を示す微化石を含むことから、この化石は県内最古の魚化石として認められています。

2つ目は、写真2の魚の化石です。この化石は、1990年(平成2年)7月ごろ、当時鳥取市立北中学校2年生であった谷浦稔さんが、国府町(現鳥取市国府町)宮下の地層から採集したもので、同年の夏に当館で行われた「標本を調べる会」に持ち込まれたものです。

この化石は、長さ約6cm、体高約

2cmで、当館が魚類学の権威である上野輝彌博士らの



写真2 イナバケツギョ

グループに研究を依頼した結果、えらの前半部分の骨に4本の棘があり、現世のケツギョに似ているが、背びれや胸びれの棘や鱗の数が一致しないことから、ケツギョにきわめて近い絶滅した新属・新種の魚であることがわかり、「イナバケツギョ」と名付けられました。学名は *Inabaperca taniurai* (イナバペルカタニウライ) と命名されていますが、これは発見地(因幡の国)にちなみ、また発見者(谷浦氏)に敬意を表したものです。

博物館にお越しの際には、これら2つの貴重な化石を、ぜひご覧ください。

(自然担当学芸員 山口 勇人)



## 馬医の医術書

ディープインパクト。この稀代の名馬は、昨年、日本列島を熱狂の渦に巻き込みました。凱旋門賞で失格となりながら、ジャパンカップでの復活、そしてラストレースとなった有馬記念での走りは、人々に多くの感動を与えました。また、その活躍を支えた調教師や蹄鉄師など裏方さんがメディアで多く取り上げられたことは記憶に新しいところです。

さて、江戸時代は馬芸が武家の表芸とされており、現代以上に名馬が珍重された時代でした。鳥取藩では、呉川という駿馬が有名ですが、どの藩でも「良い馬」を血眼で探し、数多くの馬を集め、専属の家臣をおいて大切に飼育していました。当館に収蔵される鳥取藩政資料のなかにも、そのような裏方の藩士たちの努力のあとを垣間見ることができる資料が数多く残されています。その一つが、藩主の馬の治療にあたった馬医たちの文書筆筒です（写真）。

この文書筆筒には、紺地に金泥で花鳥が描かれた美しい表装を持つ巻物が約250巻、整然と収められています。これらの巻物は、馬の病気の種類や脈の測り方、けがの直し方、薬の調合方法といった、馬の医術に関わる様々な事項が詳しく記されています。

そのなかに「灸書」「鍼書」と名付けられた巻物があります。読んで字の如く、馬のお灸と鍼に関する書で、仰向けや俯せ状態の馬が描かれ、どの部分にツボがあるのかが細かく図示されています。江戸時代に、馬へ鍼をして



文書筆筒と「鍼書」

いたことを示す史料はいくつもあるようですが、灸に関してはほとんど知られていません。灸の方法を示す「灸書」は貴重なものといえます（馬の博物館のご教示による）。

また、これらの巻物は「初段目録」、「中段目録」、「極位目録」、「九重目録」といったまとまりで構成されています。馬医にも、剣術や柔術といった武道と同様に、医術レベルに応じた段位が設定されていたことが知られ、非常に興味深いところです。

いつの時代も名馬は数々あれど、その裏側には馬医らのたゆまぬ努力があればこそ。かれらが残した資料を読み解くことで、人と馬の意外な歴史が見えてくるかも知れません。

（人文担当学芸員 大嶋 陽一）

## コラム

## 常設展示室「鳥取藩と朝鮮国」コーナーの設置について

歴史・民俗常設展示室では、今年1月31日から「鳥取藩と朝鮮国」というテーマで、既存の漂着朝鮮人をテーマとした展示に加え、鬱陵島・竹島（韓国名：独島）との歴史的な関係を紹介しています。

このテーマを加えた理由のひとつとして、県立博物館が所蔵する鳥取藩政資料の中に、現在、日本と韓国の間で領有権をめぐる論争となっている竹島に関する貴重な記録や絵図が含まれていることがあげられます。また近年、島根県による竹島の日条例の公布・施行（平成17年3月）をきっかけに、当館の資料に対する関心が一段と高まっており、これらの資料をもとにした新たな研究成果も報告されています。その一方で、こうした資料を所蔵してい

ることは、県内ではさほど認知されていませんでした。

このような実情をふまえ、今回の展示は、江戸時代の鳥取の地域にとって、鬱陵島・竹島が身近な問題として存在していたことを紹介し、一層の理解を深めていただくために取り組んだものです。展示スペースの制約と資料保護のため、すべての資料を長期間にわたって展示することはできませんが、定期的に資料を入れ替えることで、なるべく多くの資料をご覧いただく予定です。

こうした情報発信と収蔵資料の公開促進が、新たな資料の発見や、研究の進展に結びつけば、その成果を展示内容に活かすこともできるでしょう。今回の展示が、鳥取という地域の視点か



竹嶋之図(鳥取藩政資料)

ら、江戸時代の朝鮮認識、国境観、外交関係のあり方などについての関心を高め、より広い視野から地域の歴史を見直す機会になればと考えています。

（人文担当学芸員 来見田 博基）